

第28回 全国読書作文コンクール 優秀作品集

小学生5点・中学生4点

公益社団法人全国学習塾協会

平成三十年度第二十八回全国読書作文コンクール

小学生の部・大賞

あきらめない、がんばる

難波太郎（小三）

ぼくは、真備のプールの水泳教室で泳ぐことが一回しかできなかつた。本当だつたら十三回くらいできていたはずなのに。初めての場所だからとても緊張した。でも、先生もやさしくて、友達もすぐによつてきた。教室が終わつて、となりの公園で友達みんなで遊んだ。初めてだつたけど楽しかつた。次の回がとても楽しみだつた。でも、次の週は大雨が来るとテレビで言つていた。だけど絶対に絶対に行きたいと思つた。

大雨で学校までお休みになつてしまつた次の日、テレビでも豪雨ニュースをしていた。いつもの川がすごい所まで増えている映像がながれていた。ぼくは思わず、「やばい。」と言つた。

「お母さんの会社も頭までつかつたみたい。」と、お母さんが話してくれた。
「えーそんなにつかつたの。」
ぼくはとても驚いた。

ついこの前、行つた所が大変な事になつてゐるなんて信じられなかつ

た。プールもできなくなるのがいやだつたし、あの時の友達が大丈夫かとても心配だつた。お母さんがホームページを確認すると、やはり練習は中止になつてゐた。ぼくはとても残念で、あーあと思つてあきらめた。

この本に出てくる彩達は、大人達が決めた学校を廃校にするという事にも負けなかつた。自分達の学校を守りたい気持ちを一生けん命に伝えた。伝える方法も色々と工夫をした。一人では分からぬやり方を見つけ出して、力を合わせて意見を伝えた。あきらめずに行動したおかげで学校を残す事ができた。ぼくならきつといやだと思つてすぐにあきらめて何もしなかつたと思う。でも、彩達のように友達と力を合わせれば何かができるのではないかと思えた。

ぼくは、やつぱりもう一度、あそこのプールで練習したいと思う。またあそこの公園のタイヤで友達と遊びたいと思う。あきらめていたけど、友達と力を合わせれば何かできるかもしれない。あの雨の後、ぼくのお父さんは真備の人のお手伝いを行つていた。総社のばあちゃんも体育館にお手伝いに行つたと言つていた。

プールを復活させるには、お手伝いが近道なんだと思う。ぼくができる事は何があるだろう。学校の友達と考えて表にしてみようと思う。どこに行けばいいかも先生に教えてもらおう。協力してくれる大人も探してみよう。どうすればいいか分からぬ事だらけだけど、ぼくはあきらめない。プールを復活させるまでがんばるぞ。

大賞へ、審査員のひとこと

「真備のプールの水泳教室で泳ぐことが一回しかできなかつた。本当だつたら十三回くらいできていたはずなのに。」自分の悔しい気持ちをいきなりズバツ書いたことが読み手によく伝わつてきました。

「一回」「十三回」という言葉に非常にリアリティがあつて、筆者についてとても楽しみにしていたんだなということがこの数字で表されています。ある意味ではすぐ素朴に見えるのだけれど、十三という数字が出てきたおかげで、筆者の的確な感情にまで結びついていることがこの作品の魅力です。

文章の流れの中で、「お母さんの会社も頭までつかつたみたい。」と言

うことで、お母さんから聞いた言葉だけれども、筆者なりにきちんと解釈していますね。

展開の中で、的確な言葉を随所に入れながら論理を進めていっています。言葉が面白いです。物語を最初から作ろうとか論理的に展開しようというのではなくて、端々に好い言葉があつてその好い言葉に乗せて、細かな感情まで正確に伝わつていて素晴らしいですね。

受賞者のひとこと

塾のクラスの中から4人選ばれた時、とてもうれしかつたです。そこ

から、また2人になり、選ばれていく毎にワクワクしました。朝、起きたら母親から大賞だと聞き、とてもびっくりしました。初めて書いた読書感想文で選ばれたので僕はすごいことをやつたんだと感じました。

今回、大雨により倉敷市真備地域は大きな災害を受けました。岡山県は災害が少ない地域だから大丈夫と聞いていたので、とてもショックでした。災害では家や学校が大雨により水没し、すべて流されて、何もかもなくなつて空っぽになつてしましました。大事な思い出も水浸しになり、捨てたくもないのに捨てざるを得ない状態になつてしましました。

僕が同じ状況になつたらつらくて悲しくて色々なことが嫌になつてしまいそうです。今でも避難生活をし、学校にまともにいけていない友達もいると思います。僕の小学校にそのお友達が来たら、僕の元気をたくさんあげて、力づけてあげたいと思います。

小学生低学年部門・最優秀賞（小二）

すてきなばしょに生まれかわつて

田 中 詩 乃

わたしは、学校の体いくかんがすきです。わたしは、はじめて体いくかんを見たとき、「大きくて、広いなあ。」思いました。ステージがあつておもしろいです。そこでたのしかつたのは、マットあそびです。体いくのじゅぎようでいろいろなあそびかたをならいました。マット一つで、こんなにあそべるんだと、びっくりしました。学校たんけんで体いくか

んの二かいへいってみました。そこには、はじめて見る大きなカーテンがあり力いっぱいひっぱつらないとしまりません。そんな大きいものがたくさんある体いくかんは、わたしのお気にいりのばしょです。

わたしが大すきな体いくかんがなくならないでほしいです。すごくかなしいです。こんなに広いばしょで、あそぶるところはほかにあります。まだ一年とはんぶんぐらいしか、学校にかよっていなければ、入学しきからはじまっておたのしみ会、体いくのゲームなどたのしい思い出ばかりが体いくかんには、あります。

本の中のあやたちは、学校をのこすために、いろいろがんばりました。わたしはまだ二年生なので、あやたちのようなものすごいかつどうはで

きないかもしません。でも、もし、五、六年生があやたちのようなかつどうをしていたら、わたしもぜつたいお手つだいをします。あやたちの学校のように、わたしたちの体いくかんも、地いきのみんながつかえるばしょになつたらいいなと思います。そうすれば、わたしたちが、中学生、高校生になつてもつかえます。そして、大人になつて子どもができたとき、子どもといつしょにあそべるすてきなばしょになります。

わたしたちの学校がなくなるということです。でも地いきのみんなにつかつてもらえるばしょになるというのは、とてもすてきなことです。もし、わたしたちの学校がなくなるなら、そんなすてきなばしょに生まれかわつてもらいたいです。

対象図書名 小学校がなくなる！

受賞者のひとこと

わたしが書いた読書作文が一位になつたと聞いたとき、とてもびっくりしました。本のお話が学校についてだつたので、まい日かよつているわたしの学校を思つてかべながら書きました。だから、思つていることがたくさん書けたのかもしれません。この本で学校がとても大切なものだとわかりました。これからも本を読むときは、わたしならどうするだろうと思いながら、たくさんの中を読んでいきたいです。

小学生の部・最優秀賞（小四）

最後まであきらめない

平 塚 陽 丸

一度もジャンケンで負けたことのない「ジャンケンの神さま」がいると聞いて、どんな人なのか、その存在にとても興味をもつた。強くなるためには、それなりの修行をしたにちがいない。ぼくは、強さの秘密を知りたくてたまらなくなつた。

読んでいく内に、ジャンケンに勝つための極意がぼくにも少しずつ分かつってきた。相手の動作を完全に予測する「見切り」というもの。ほんのわずかな相手の動きから、考えていることまで読み取り、一瞬で見きわめるというものだつた。これは、他のスポーツにも通じるものだつた。一流アスリートと言われる人たちとは、この「見切り」が身についているのだろうと思つて、ぼくはとても納得した。

でも、そういう技を見につける前に、ぼくは気持ちの持ち方がとても大切だと思った。努力を続けようとする気持ち、最後まであきらめないという気持ち。その気持ちがなければ、何も実現しないし、成功もないだろう。あきらめた時点で、可能性はゼロになつてしまふのだから。

ぼくは今まで、途中であきらめてしまつたことが何度もある。毎年恒例、なわとびの記録を競う大会でもそうだった。みんなで大会に向けて

練習する。ぼくも自分なりに一生けんめい練習する。でもみんなは、いろんな技が出来るようになつていく。みんなは、どんどん上手くなつていく。ぼくは、二重跳びと交差跳びは何とか出来るようになつたが、さらには上の、手を交差させて二重跳びをする「二重交差跳び」は、なかなか出来ない。たくさん練習した。それでも大きな変化はない。どうしよう。みんなは楽しそうにやつていて。そして、どんどん上手くなつていて。ぼくは、あまり進歩がない。だから、どんどんあせつっていく。ついにぼくは、へとへとに疲れてやめた。練習するのをあきらめてしまつたのだ。その時点では、何の可能性もなくなつてしまつたのだ。

テスト問題でも時々ある。自分で考えてまとめるような記述問題が難しくて、何も書かず空欄のまま提出することがある。間違いをおそれず何か書くようにと先生に言われてもぼくはどう表現していいのか分からぬ。考へても、いい答え方が見つからない。変なことを書いて笑われたらイヤだと思つたりして、ますます書けなくなる。時間はあつたのに、結局ぼくは何も書かずに提出するのだった。

同じ小学生なのに、アイコは決してあきらめなかつた。どんなに不利な勝負でもあきらめずに正々堂々と戦つた。そして、結果を残した。へこたれであきらめてしまうぼくとは大違いだ。なんて強い女の子なんだろうと思う。その強さは、やはり気持ちの持ち方だ。あきらめるか、最後まであきらめないか。この差はとても大きい。「あきらめなければ可能性はある」この言葉をぼくは心に刻んだ。

対象図書名　ジャンケンの神さま

ます。

選んでいただきありがとうございました。

受賞者のひとこと

毎週土曜日、塾があります。前日の夜、先生から電話があつて、両親も一緒に教室にどうぞと言われました。ぼくは、もしかしたら何かやられたのかなと思い、とても緊張しました。考えても思い当たることがなく、よけいに緊張しました。引きつった顔で教室に入ると、先生は笑顔で「最優秀賞おめでとう」と言いました。あまりの驚きでぼくは何も言えませんでした。父も母もただただ驚いていました。入塾二年目のぼくが、まさかこんな大きな賞をいただくとは考えもしなかつたからです。作文が苦手なぼくに両親は、まず書くことに慣れてくれたらと思つていたからです。でも、一番驚いたのはぼくでした。今、うれしさと別な緊張感でいっぱいです。

表彰式の日まで、この緊張が続きそうです。ぼくにとつて、ここからがスタートだと思います。これからも、たくさん本を読んで、よく考えて、作文も毎年書いていきます。毎年、本気で書いていこうと思つてい

小学生の部・最優秀賞（小五）

春菜さんと同じぼく

竹本昂泰

毎年楽しみにしているラグビーの夏合宿。今年は台風直撃で泊まることができなかつた。ぼくは不満がたまつて台風をけり飛ばしたい気持ちになつた。花火が空ではじけるような、ぼくのうれしさ百万点にはなれなくて、モヤモヤしたまま車に乗つた。終わつてみると前の気持ちはすっかり忘れていた。やつぱり練習は楽しかつた。

ラグビーは二年生から続けている。偶然クラスメイトが、ぼくの習つてゐる合氣道に來たのだ。その子のお母さんがぼくの体格を見て、ラグビーに誘つてくれた。ラグビーと言えば、五郎丸選手のポーズをまねでいるだけで、一回も試合を見たことが無かつた。そしてなんと言つてもぼくはスポーツが苦手だつた。でも友達がいるからやつてみたいと思つた。だれかがそばにいて心の支えがあつて、一步ふみ出す勇気が出て来る。そこが春菜さんに似てゐると思った。自分を見ているようで、少しきすぐつたかった。背が高いので、小さい子がたくさんいると思つていた。あまり不安は無かつた。でも、大きい子が多くて、恐ろしいタックルの音が耳の奥まで響いてきた。『やばい、すぐにやられるかもしない。』ぼくの心に不安の水が溜まつてきた。さらに、「小さいからつてなめるな

よ。」と、いきなり言われた。不安の水が津波になつて押し寄せてきた。

さらに、誘つてくれた友達がいきなり引つ越した。踏ん張つていたぼくも、とうとう流された。流浪の旅人になつた気分だつた。でも難破はしなくなつた。練習は楽しかつた。やめたくなつた。だから家で練習したり、タックルバックを持つて帰つて上手になりたい気持ちをぶつけた。やり続けたい気持ちが伝わつたのか、少しづつ仲間に入れてくれた。すると、試合中に思つてることを遠慮せずに言えた。みんなからボールをもらえるようになつた。好きなことが見つかつて世界が広がつたり、困つたことが起こつてもあきらめなかつたり考えたりするところが春菜さんとぼくとをリンクした。今よりもっと強くなりたいと思つた。「今のはフルパワーで無敵だ。やつてやるぞ。」と。そんな時、急に背が高くなり体重が減つた。得意なタックルがどんどん効かなくなつた。また心がしほみそうになつた。でも、前のぼくではない。強くなつて成長している今のぼくはできる。やつてやる。もつと食べて、巨人と呼ばれるくらい大きな体を造つていきたい。

十一月に全国につながる試合がある。その時、ぼくをラグビーに誘つてくれた友達と戦うことが今のぼくの目標だ。そしてなんとこの本には続きがあるらしい。すぐに続きを読みたい。だつて少し弱いけれど、一生けん命頑張つている春菜さんはぼくと一緒にだから。

受賞者のひとこと

ぼくは去年最優秀賞を受賞して、佐賀の表彰式に行きました。初めて沢山の人の前で盾をもらえて、体が鉄のかたまりになつたみたいに緊張しました。今年の感想文を書き終わつたとき、『今年は無理かな。なかなかうまく書けなくて何回も書き直したし、東京は行けないかな。』と思つて、少しだけ諦めていました。でも、先生から電話がかかってきた時、すぐに僕が頭の中でスキップしていました。とても驚いて、でも本当にうれしかつたです。今回、主人公と僕の性格や友達との関わり方がとても似ていたので、そうだそだ！という気持ちを作文に書きました。二回目の表彰式で不安はありません。名前を呼ばれたら、元気よく返事をしたいです。選んでくださり、ありがとうございました。

小学生の部・最優秀賞（小六）

ちいさい図書館

福 田 虹 胡

平成三十年七月豪雨。七月七日、真備町の小田川が氾濫した。曾祖父母の家のすぐ近く。連絡がつかなかつた。父は一日中あちこちの避難所をまわり、二人の姿を探した。

夕方、ある避難所にいると連絡が入つた。急いでつくつたおにぎりとお茶を持ってかけつける。無事だつた。二階の窓からボートで助けられたらしい。九十才近い二人は疲れきつていたが、笑つていた。安心した。そして、父の実家へ身を寄せる事になつた。と、その時、子ども会の会長をしている母の携帯が鳴つた。私の通う小学校にも、大型バスで続々と被災者が入つていて、食べ物と人手が全く足りていらないとの連絡だつた。すぐに子ども会全体に連絡をまわし、小学校へ急いだ。あつとう間に山盛りのおにぎりが集まつた。

翌日、朝はみそ汁、夜はカレーの炊き出しをした。タオルや水、古着など、ひつきりなしに届く物資が、げた箱やろう下を埋めつくしていく。整理しても整理しても追いつかない。あふれかえる人と物の中で、私にもできる事をしながら、手伝つた。母は毎日三時間睡眠で動いて

いた。それでも、「子ども会が止まる」と言つて、動き続けた。私もお手伝いをしながら、避難所のボランティアの大変さを体で感じた。

数日後、私は父に連れられて真備に入った。見慣れた道を進むと、突然、目の前から色が消えた。全てが土におおわれている。電柱の上の方にゴミがからまっていた。不思議に思つて見ていると、「あそこまで水がきたつてことなんで。」と、父が教えてくれた。想像することもできなかつた。とても恐ろしいと思つた。曾祖父母の家は、壁が全て流され、一階の床は泥だらけで、ひどい光景だった。避難所の人達は皆、この町で同じような被害にあつているのだと思うと、胸がキューンと締め付けられた。

災害から一週間たつと、避難所は少しずつ落ち着いてきたようで、母も私が寝る前には帰宅できるようになつていて。私はそれまで、避難所の中でお手伝いをしていたが、もつと自分にできる事は無いかと考えた。そんな時、日中ずっとテレビを見たり、ゲームをしている被災者が何人もいた事を思い出した。

春菜は、『ちいさいおうち』を読み始めると、いつも時間を忘れてしま

う。私も、本が大好きだ。本を読んでいると、本の世界の中でいろんな所へ行つたり、いろんな経験ができる。私は、被災者の人達も、本を読んでいる間だけでも辛い事を忘れられるかもしれない、気分転換になるかもしれないと思つた。私は、自分の本棚から十冊の本を選び、それを

抱えて避難所へ届けた。

それは、私なりのちつちやな図書館。少しでも助けになれば、少しでも喜んでもらえれば、そんな思いの込もつた、ちつちやな図書館だ。

対象図書名　坂の上の図書館

受賞者のひとこと

私は三年生の時に出品を始めて、三年連続優秀賞だったので、毎年あと一步、悔しい思いをしてきました。今回、念願の最優秀賞を受賞できただので、とてもうれしく思います。

作文に出てくる私の小学校の避難所は、二学期の始業式前日に閉鎖されました。私の『ちいさい図書館』も、段ボールに詰められて別の避難所へ運ばれて行つたと、母から聞きました。私達には災害前の毎日が戻つてきましたが、被災者の皆さんは、他の避難所や仮設住宅へ移り、今後も避難生活が続くそうです。これから、被災者の方々に元の環境と生活が戻り、私の『ちいさい図書館』が閉館する日が、一日も早く来る事を願っています。

今回の経験を通して、本が好きな気持ちがより強いものになりました。勉強していく疲れた時は、休憩に本を読むと言うと周りには驚かれますが、これからもどんどん本を読んで、いろいろな世界に行って、たくさんのことを見たいと思います。

中学生の部・大賞

守られるべき存在

池田宗弥（中一）

「いじめはなぜ無くならないのだろう。」それが、この本を読み終えた

時の気持ちだった。僕はいじめのニュースを何度も見たことがある。いじめられ、行き場がなくなつた人は、自殺に進んでいる。僕はそれに心を縛られるばかりだ。いじめる者が悪いのか、いじめられる者が悪いのだろうか。それとも、何もしない周りの人達が悪いのか。僕は全員がいけないと思う。

僕も本当はいじめられていた。初めは、いじめる側だったが、いじめられるようになつたのだ。いじめる側では分からなかつたいじめられる側の気持ち。その悔しさと、悲しさを知つた時、僕は自分自身を疑い責めるばかりだつた。

この本では、桃がいい人ランキングで選ばれて、クラスから全てを任されていた。そんな嫌がらせに近い行為がどんどんエスカレートして、いじめにつながつていて。あの時の僕と同じだ。僕も桃のように、嫌がらせから始まつて、それがエスカレートして、いじめられるようになつたのだ。僕は助けてほしかつた。でも、誰にも気づかれていないかのよ

うに、無視され続けていた。僕は今までの自分の行動がいけなかつたのかと、反省するばかりだつた。「今まで自分がしておいて、自分にされたらごめんなさい。」そんなことが通用しないことは分かつていて。でも、たつた一人だけ僕の味方になつてくれた友達がいた。その友達が味方になつてくれなかつたら、僕はずつといじめられていたままだと思う。僕はこれを機会に、あの友達のように、人を助けたい。

この本でも圭機という人が桃を助けていた。僕は圭機のように、勇気を持つて近づくことが大切だと思う。自己中心的にならず、他者を思いやることができる人。そんな人がたくさんいれば、いじめは無くなるはずだ。いや、いじめは起こらないはずだ。

しかしそうはいかない。一つのいじめが無くなつても、再び新たないじめが生まれる。だからいじめは無くならない。

だが、圭機は言つている。「人間にはいじめ遺伝子がある。しかし、その遺伝子は今使うものではない。」と。つまり、いじめる者は、今その遺伝子を使うことはせず、大切なものを守るために温存しておくべきだとう。

だが、そんなことを言つてもいじめが無くなるわけではない。いじめていた者が、いじめられるようになつたり、嫌がらせがエスカレートして、いじめは増えるばかりだ。しかしいじめを減らせないのはいじめる者も悪いが、いじめられる者も、周囲の人もいけないのだ。いじめられる原因を作つたり、早めに相談をしない、いじめられる者。そして見て

見ぬふりをして、近づこうとしない周囲の人がいるのも、いじめが無くならない原因だ。反対に、圭機のような人がたくさんいれば、いじめは起きていなかつたはずだ。しかし、そう意識する人はそんなにいないだろう。

一人一人が意識をしていなくとも、誰か一人でも動ける人がいれば、周囲も変わつてくるはずだ。

僕はいじめを見たりしても、すぐには動けない。あの時の自分を思い

出して、自分までいじめられると考えてしまうからだ。でも、そうすれば、いじめられている人が僕と同じような辛い思いをすることになる。だから僕は、勇気を持つて動けるようになりたい。いや、自分のことだけではなく、周囲のことを考え、自分でできることを探したい。そうすれば、周囲の人も、動くことができるきっかけになると思う。僕は、そんな環境をつくることが、とても大切だと思う。

僕は将来、教師になりたいと思つている。いじめる側、いじめられる側を経験し、身勝手な立場の違い、辛かつた心の痛み、孤独、味方になつてくれた友達の大切さを身をもつて知ることができた。きっと僕の成長には、この辛い体験が必要不可欠で、将来につながる重要な学びだったのだと思う。

世界には一人として同じ人間は存在しない。命の重みは皆平等であり、どんな人も守られるべき大切な存在だ。相手の立場を考える、思いやりの心を育むことができれば、きつといじめもなくなるはずだ。

大賞へ、審査員のひとこと

「初めは、いじめる側だつたが、いじめられるようになつたのだ。」と真情を吐露して、なおかつそれで終わりではなくて、人と人との関係についてかなり格闘して考えを深めようとしているところが偉いなと思いました。

筆者は本を読んで感想を書いているが、いまの子供のいじめの状況みたいなものが、読むものにはつきり見えてきます。読み手にとって『ああ、こういうものなんだろうな』ということがこの文章の中に見えることが素晴らしいです。

筆者には、いじめは決してなくならないことがわかつています。だから、主人公が現れてもいじめはなくならないことを知つていて、筆者はいじめの持つ本質まで理解していることがわかります。こうすればいじめはなくなるかという肯定の後、なくならないと否定を繰り返しています。その否定の繰り返しが非常に上手いと思いました。

いじめつて大変なんだなあとこの文章によつて学ばせてもらつた気持ちになりました。

初めて大賞受賞のお知らせを聞いた時、驚きと喜びで心が飛び上がりました。

中学生の部・最優秀賞（中一）

科学の扉を開けて

菅原玄晶

いい人ランキングという本を通して、過去の体験と向き合うことで、当時の心の痛み、孤独、悲しさや辛かった感情を思い出し、心が沈むこともありました。しかし、時間をおいて当時のこと改めて向き合うことで、自分自身一つ大きく乗り越えた感覚を持つことができました。人の優しさ、友達の大切さを身を持って知ることが出来た僕は、少し強くなれた気がします。どんな人も誰かの大切な存在であり、守られるべき大切な存在です。相手の立場に立つてみることはとても大切です。もし僕のように辛い思いをしている人を見つけたら、今度は勇気を持って関わっていこうという気持ちをこの本から得ることが出来ました。

ひと口に科学と言つても、その分野はとても広い。今回、宇宙開発をする科学者のさまざまな活動を知つて、僕は科学の奥深さを改めて感じた。同時に、幼い頃から科学者になりたいと思っていたその夢を実現させていという気持ちが、ますます強くなつた。

僕の父は大学で建築学を研究している。その影響を最も受けたのが、姉弟の中でも僕だつた。幼い頃から父の研究室に行くのが一番の楽しみだつた。僕にとって、そこはまさに科学の扉を開けさせる場所だつた。もちろん父の研究している難しい学問は全く理解できなかつたが、資料を見たり、実験道具を触つたりしている内に科学への興味がどんどんふくらんでいった。

小学校時代、友達から「科学バカ」とあだ名をつけられても、僕はむしろ喜んでいたくらいだつた。科学に関する話をするとき僕は止まらなくなる。普段それほどおしゃべりではない僕が、熱弁をふるう。周りの友達は「もういいから」という態度になるが、それでもおかまいなく、僕は説明を続けたりする。特に、ロボットのことになると、熱くなる。幼

い頃、ロボットコンテストの世界大会を実際に見たのがきっかけで、その面白さにはまつていった。今やロボットを含め、AIの進化はめざましい。少し前には考えられなかつたことが、どんどん実現している。先のことまで考えて進める将棋の分野でも、人工知能が勝つてしまつた。まして人間がする単純作業なら、いとも簡単にしかも正確に出来る。どんなに過酷な労働だつたとしても、人間のように疲労しないから文句も言わない。だから、人間が立ち入れない危険な場所での活躍が大いに期待できる。この本でも人間が行けない空気のない所でも、しつかり任務をこなしていたので、僕は拍手を送りたい気持ちになつた。

今、宇宙への関心は世界中で大きくなつていて、宇宙の研究をしている科学者がいかに多いことか。考えてみると、人類初の宇宙飛行から、六十年もたとうとしている。僕が産まれるはるか前から始まつたのだから、人類の知恵はすごいと思う。もともとアメリカと、ロシア中心に進められてきた宇宙船の開発だが、近年は民間企業も加わり、大きな役割を担うようになつてきた。日本が誇る独自技術で、宇宙開発に貢献する日も近い気がする。さらには、火星旅行が出来る日が近い将来、可能になつていいと思う。宇宙新時代を想像するだけで、わくわくしてくる。ただ、宇宙船の開発を本格的に進めていくには、やはり漠大な資金が必要になつてくるので、世界が手を取り合つて国際協力していく必要があると僕は思う。

中学生になつて、科学バカの僕は当然のように「自然科学部」に入部

した。入つてみると、そこは科学好きの集団だった。中学生と言つても、驚くほど高度な研究をしているので、僕はそこですごす時間がとても心地よい。研究テーマも自分達で考えて進めていくので、とてもやり甲斐がある。最初の研究は「水の浄水」だつた。何度も実験を繰り返し、塩素を取り除く方法を考えた。その過程は、気の遠くなる程、手間がかかつた。長い行程を重ね、ようやく結果が出る。そのデータをレポートにまとめていく。根気の要る、とても地味な作業だ。それだけに完成した時の喜びは、言葉では言い表せないほどだ。こうした研究成果を、大学が企画するイベントで発表する。そこには毎年、多くの学校や企業も参加して、研究成果を競い合う。脳の研究や、飛行機の研究など、興味深いテーマばかりだつた。この中から、将来の大科学者が出るのではないとかと、期待で僕の夢はどんどんふくらんでいく。このイベントは、出場者が一番良かつたと思うチームを選ぶことになつてているのだが、その最多賞を獲得できたのは、何と僕たち科学部だつたのだ。その賞を十二個獲得というのは、イベント発足以来、初の快挙だつた。この快挙に、僕も含めわが科学部の科学者は科学にますます、のめり込むのだつた。成功の要因は、僕達の情熱はもちろんだが、設備に恵まれているという点も大きい。他の中学校に比べたらとても恵まれた環境にあるということは確かだ。

「宇宙開発」となると、僕の科学部とは比べものにならない程、スケールが大きい。僕達の研究でさえ、時間と労力が相当かかるのだから、

宇宙となると、想像もつかない。どれだけの人と時間と労力と、そしてお金がかかるかいるのだろう。それら全ての総力をあげ夢のような宇宙開発の計画が、近い将来現実に変わるのである。その陰には、常に科学者達の努力があることを忘れてはいけない。いつか僕も、その仲間入りをしたいと本気で思っている。

対象図書名　月はぼくらの宇宙港！

活躍を見ながら、いつかは自分も……と、思ってきました。先生は、賞にこだわらずに「成長できるように」と、いつも話しています。書き続けることが大切だと話しています。僕もそう思って取り組んできました。そして今回、このような名誉な賞をいただくことができて、本当に夢のようです。部活動の出来事を書くことができたのは、僕にとって幸運なことでした。そして何よりも、自分の大好きな科学がテーマだったので、書くこと自体、とても楽しかったです。

この受賞を機に、今まで以上に部活にも力が入りそうです。そして、これからも作文を書き続けていこうと思っています。

話があると電話で先生に言われ、その日、僕と母は教室に向かいました。何を言われるのか全く見当もつかず、緊張しながら先生の言葉を待ちました。「最優秀賞をおめでとう！」先生のその言葉に、母はキヨトンとしていました。そのあとも、母の口からは「え？」、「え？」、「え？」しか出できませんでした。全く予想外のことでした。僕も驚きのあまり、何も言葉が出てきませんでした。

四年生で入塾し、毎年このコンクールに参加してきた僕にとって「最優秀賞」は、やはり憧れであり、目標でもありました。塾の先輩たちの

中学生の部・最優秀賞（中二）

私は私だから

吉野愛里珠

必ずしも正義が勝つとは限らない。さまざまな人種が暮らすアメリカ社会においては、悲しいことにそれが現実なのかもしれない。実際、白人警官が黒人達に対して不当な扱いをしている映像をたびたび目に見る。日本人の私達にはどうて容認できるものではない。黒人達の怒りが大規模なデモとなつて白人達に向けられても、果たしてその悲痛な叫びは誰かに届いているのだろうか。主人公達を追い込んだのも「白人至上主義」を良しとする考えが根底にあるように思われてならない。

そもそも人種に優劣などないはずなのに、世界の至る所で争いが絶えないのはなぜだろう。「自分達民族こそが一番」という思い上がりが、なんだ行動に現れるのではないか。それは何も外国に限つたことではない。私達子供の日常にも潜んでいるのだ。

子供は思つたことをそのまま言う生き物だから、何かと厄介だ。大人のように心の奥に留めておくことが出来ない。大人のようにならぬ空気を読んだ行動も出来ない。小学生は、感情にまかせて正直に言葉にする。たとえそれが、どんなに相手の心を傷つけることにならうとも、おかま

いなしだ。私の小学校時代は、まさにそれが日常だつた。

日本人の父と中国人の母を持つ私は、日本で生まれ育つたので、私としてはここ日本が自分の故郷だと思つてゐる。実際、中国語はほとんど話せないので、自分でもあまり中国を意識せずに暮らしていた。ある日、友達と何気ない会話の中で自分の素性を話したら、あつという間にクラス中に伝わり、みんなが知つてしまつた。私はその時、やや自慢気に言った記憶がある。みんなと違つて、私は日本だけでなく中国の血も持つているのだと。あの頃、私にとつては確かにそれが自慢だつた。でも私のその態度がみんなの反感を買つたらしく、それ以来みんなの態度が変わつた。中国人の非常識が何かとテレビで取り上げられていた時期だつた。日本の有名なキャラクターを平氣でパクつたり、観光マナーが悪かつたりと、中国人の悪い話ばかりが耳に入る。そんな映像を見るたびに、私の「自慢」もどんどん萎んでいったのだ。中国のイメージの悪さは、小学生にも明らかに浸透していた。それが、自己主張するタイプの私をやりこめる、うつてつけの材料となつた。私に対するからかいが始まつた。いつものように私が自分の意見を言うと、「中国語で言われても何言つてゐるのか全然わかりませえん。」と、誰かが言う。「ここは日本だから、ちゃんと日本語で話して下さあい。」と誰かがつけ加える。そのたびに、クラス中に笑いが起つて、うんざりするような毎日が続いた。そんなことで私は傷つかなかつた、と言えば嘘になる。でも私はイジメの被害者の顔はしたくなかった。学校を休むことなく、普通にしていた。それが

私なりのプライドだつたから。

中学に入つて、そんな煩わしさから解放され、ホツとしていたが、去年の夏、中国主催の国際交流キャンペーンの話が母から持ち上がつた。

中国の血縁があつて海外に住んでいる青少年同士の交流を目的とした研修旅行だつた。その話を聞くや否や、私は拒絶反応を示した。冗談じやない。一人で中国へ行くなんて。中国語もろくに話せない私が、見ず知らずの外国人と何日も一緒に過ごすなんて。絶対無理に決まつていて。行かない！絶対行かない！押し問答をくり返したあげく、私の抵抗も空しく、母は強引に申し込んだのだった。

憂うつな気持ちのまま、しぶしぶ参加した。まず、大勢の外国人に圧倒された。イギリス、イタリア、ドイツ、南アメリカなど、あらゆる国々から参加していた。共通点は、皆中国の血を持つていること。それ自体を引け目に感じていた私は、一人心を閉ざし誰とも話さなかつた。中国語を流暢に話すみんなに対して、私は勝手に壁を作つていた。それに、そんな私を見兼ねて、彼らは笑顔で話しかけてくれた。片言の中國語しか話せない私に、身ぶり手ぶりで接してくれた。優しさや情熱心の広さが伝わつてくる。うち解けるのに時間はかからなかつた。私はいつも間にか彼らの輪の中で自分のことを話し、相手のことも知りたいと思うようになつていた。彼らはみんな、中国の血を誇りに思いながら今を生きている。将来の夢を持ちながら、前向きに生きている。住んでいる国はそれぞれ違つても中国という糸で結ばれているすばらしい人達に

出会えて、私の世界も広がつたのだつた。

母が無理にでも私に行かせた理由はこうだ。自分の殻に閉じこもつていないので、もつと視野を広げるべきだと。確かに、今なら分かる。

いつも厳しい先生に、最近褒められたことがある。「愛里珠は、ちょっとやそつとではへこたれない強さと生きる力に溢れているね。」と。もしかしたら、それは私の中にある大きな中国大陸の血のおかげかも知れない。

対象図書名　わたしは、わたし

受賞者のひとこと

小学二年生で入塾した私は、毎年欠かさず作文を書いてきました。四年生の時、「最優秀賞」をいただき、今回で二度目の受賞となりました。このような名誉な賞を二度もいただくことができ、とても感激しています。

一回目の受賞をきっかけに、私の中で作文に向かう姿勢が確実に変わりました。一冊の本をじっくり読み、深く考えることが身についてきました。それが勉強にも役立つていて思っています。とは言つても、今

回は、考えてばかりで、なかなかペンが進まず、周りがみんな仕上げに

入っているのに、私だけ下書きすら出来ていらない状態でした。大幅に遅

れをとってしまい、先生に見放されるのではないかと焦りと不安を感じ

たのが今回でした。締め切りギリギリまで悩み考えて提出した作文だつ

ただけに、最優秀賞と聞いて、嬉しさも倍増です。

この本を読んで、人種問題について考えるいいきっかけになりました。

そして、小さなことばかりに囚われていた自分を反省することもできました。研修旅行を勧めてくれた母と、広い世界を教えてくれた友人達にも「ありがとう」と言いたいです。

これからも、読書を通して自分を成長させていきたいと思います。

中学生の部・最優秀賞（中三）
当たり前の気持ちを大切に
千田陵太

みんながいい人だなと思う人ってどんな人だろう。頭のいい人は成績の良い人。運動神経のいい人は体育で何をしても上手い人。性格のいい人は人はいい人と呼ぶのだろう。でも、性格のいい人だと感じる時は結局自分にとつて都合のいい人のように感じる。誰もがやりたくない事を自ら進んでくれたり、頼み事をしたら嫌な顔せずにやつてくれたりするような自分にとつて害がなく、何でも引き受けてくれる人をいい人と思ふのだろう。でも、都合のいい人をいい人だと思つてしまふ僕自信、本当にそうだろうかと考えてしまつている。僕はいい人ではない。やらなくてすむ事は出来るならやりたくない。でもやりたくないと思つても断る事が出来ず、引き受けてしまう時がある。なぜかというと、他人からの見た目を気にしているからだ。

人は他人から自分がどう見られているかは気になるはずだ。モテたいとかかっこいいとか思われたいと見た目を気にする人もいるだろう。時には思っていないような事を発言して悪い人だと思われないようにする人もいるだろう。僕はそうだ。クラスの中でどう見られているのか気に

なる。発言する時も言葉を選んでしまっている。いい人だと思われたいと思つてゐる時点で僕はいい人ではないのだと反省しなければならないのかもしれない。本当にいい人とは、当たり前に自分の事より他人の事を気にかけてあげたり、何の見返りも求めないで他人を優しく思いやつてあげれる人のではないのだろうか。都合のいい人はいい人ではないのだ。人は皆、優しくされて嫌な気はしないだろう。

僕の学校では「グッド・ビヘイビア」の取り組みをしている。思ひやりある行動や好ましい言動を先生が見かけてカードを渡してくるのだ。僕も何度かもらった事があるが、困つてゐる時に助けてあげたり、優しく思いやるなんて事は、人として当たり前の事で、それを誇るのはおかしいのではないのだろうか。その当たり前の事を出来ない人が多いからこのような取り組みをしなければならないのだろう。

人は色々な事を考えて思う。優しくて親切な友人に對してすら苛立ちを感じたりする人も中にはいるだろう。自分自信にその優しさがないから優しい友人に対しても文句を言つたり、時には利用したりする事があるのかもしれない。でも、素直に優しくしてくれる人に感謝するべきであつても、文句を言つたり利用するのは間違つてゐる。

「いい人キャラを演じている」という言葉があつた。他人からの評価を氣にしていい人のフリをする。言葉を選んで発言する。僕はこれだ。いい人キャラを演じてゐるのだ。学校では評価を氣にして生活しているが、家の中では正直やりたい放題、言いたい放題だ。今まで、何とも思

つていなかつたが他人からどう見られているかをすごく気にしていた事に気がついた。人からの見た目を氣にするのは悪い事ではないけどそれより先に、人としてどうあるべきかを先に考えられる人になればいい。自分がされて嬉しいと感じた事、助けてくれて有り難かつた事、素直に喜んで同じようにしてあげられるそんな人でいよう。

この夏におこつた西日本豪雨災害。今まで同じような光景はテレビの中だけの話だつたけど今回は身近でおこつた。真備には行つた事もないし、場所もしらないが倉敷市の話だ。僕の学校の体育館も避難所になつてゐる。こんな災害の時にボランティアとして現地に行く人、避難所で手伝う人、募金をする人。いい人の形はそれぞれあつていいのかもしれない。地球上には色々な人がいる。僕は僕に出来る事をやればいい。評価を気にするのではなく、優しさや思いやりを持つた人として当たり前の気持ちを大切にしたい。

対象図書名　いい人ランキング

受賞者のひとこと

「いい人」とはどのような人なのだろう。僕がこの本の題名を見て最初に思つたことだ。僕自身、自分のことをいい人とは思つていなかつたので、この本に興味を持つた。読み続けていくと、何が正しいのかどんどん分からなくなつていった。特に「いい人キャラを演じている」とい

う言葉に混乱した。自分のことをよく見せようとしていることが間違っているのだろうか。まさに僕がそうだったから疑問に思えて仕方なかった。他人からどう見られ思われるのかを気にしていい人キャラを演じるのは決して悪いことではないのだ。だが、そのことにいらついていじめるのは絶対にしてはいけない。当たり前のことだ。相手とお互いのことを考え、思いやることができる当たり前の気持ちを大切にするということが今までの僕には足りてなかつた気がする。

自分を見つめ直すことのできる本に今年も出会えて、昨年に続いて最優秀賞をもらえたことは嬉しい。だが、演じていたからこそ恥ずかしくもある。

**第28回(平成30年度)全国読書作文コンクール
優秀作品集**

平成30年10月 発行

発行 公益社団法人 全国学習塾協会
〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-39-2
TEL 03-6915-2293 FAX 03-6915-2294
E-mail info@jja.or.jp

